國語讀本

尋常小學校用

卷四

8
170

検定申請本

K120.8
83
4

K120.8
83
4

文學博士坪内雄藏校閲
高知縣教育會編纂

國語讀本

尋常小學校用

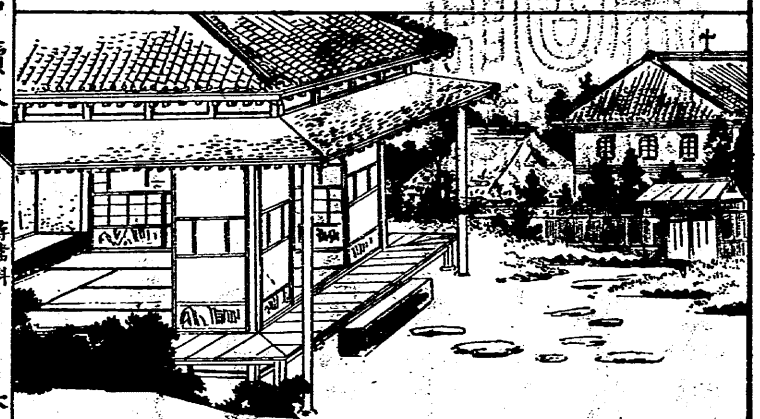
卷四

東京 合資會社 富山房發兑

巻四　目次

第一、家　一
第二、村と町　二
第三、海はどのよーなもの　二
第四、海ノケシキ　四
第五、さゞえのじまん　六
第六、一の谷のしろぜめ　七
第七、春夏秋冬　九
第八、くだもののうた　十
第九、たけがりの話（上）　十一
第十、同（下）（練習文）　十二
第十一、取り入れ　十三
第十二、枡　十四
第十三、こしをれ雀　十四
第十四、同（二）（練習文）　十六
第十五、アリトセミ　十八
第十六、勉強がしら　十九
第十七、むろの梅とはの梅　二十一
第十八、はです虎をころす（練習文）　二十三
第十九、炭　二十四
第二十、しほばら多助　二十五
第二十一、岩戸びらき　二十六
第二十二、ひな祭　二十八
第二十三、春（練習文）　二十九

住家



第一　家

鳥ハ、スヲツクッテ住ム。ケモノハ、アナノ中ニ住ム。人ハ、家ヲタテ、雨カゼヤ、アツササムサヲシノグ。

家ハ、大テイ、木デツクルガ、レンガワヤ

戸風

石デクミタテルコトモアル。

ヤネガナケレバ、雨ヤユキガフセガレズ、カベヤ戸ガナケレバ、風ガフセガレヌ。カベニハ、マドヲコシラヘテ、アカリヲトリ、又、戸ハ、アケタテノデキルヨーニシテオク。

又、下ガ、土デハ、スワルニモ、ネルニモコマルユヱ、ユカヲハル。

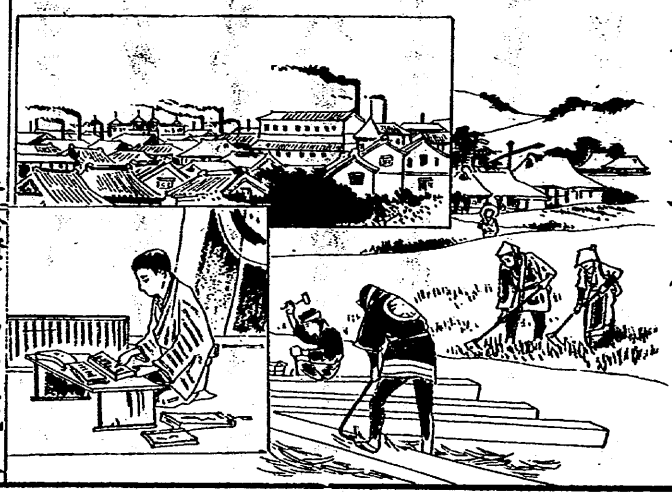
人家

村

コレガ、家ノクミタテデアル。

第二　村ト町

山ベデモ、ウミベデモ、人家ノ多クアルトコロヲ、村ト云ヒマス。村ニハ、イーフガ住ンデ居マス。イーフハ、



畑

田畑ヲ　タガヤシ、コクモツヤ　ヤサイナドヲ作ッテ、クラシヲタテ、ヰマス。

ウミベノ村ニハ、リョーシガ、多ク住ンデヰマス。リョーシハ、魚ヤカヒルイヲトルコトヲ、シゴトニシテヰマス。

村ヨリモ、人家ガ多クテ、ニギヤカナトコロヲ、町ト云ヒマス。町ニハ、商人ヤショク人ナドガ、多ク住ンデヰマス。

商町

海

ショクニンハ、イロ〳〵ノウツハヤドーグナドヲ作リマス。商人ハ、ノーフヤショクニンノ作ッタモノヲウリ買ヒイタシマス。

第三　海はどのよーなもの

太郎は、まだ、海を見たことがありませなんだ故、ある日、父に向ひ、

「海は、どのよーなものですか。」

長

とたづねました。

父「さよーさ、海といふものは、水が、どこまでも〳〵つづいてゐて、それはそれは、ひろいところぢゃ。」

太郎「それでは、川が、どこまでも〳〵つづいたよーなものでありますか。」

父「いや、川のよーにせまいものではない。はゞも長さも、かぎりがなく、

池

ひろい〳〵ものぢゃ。又、海の水は、川の水のよーに、同じ方が〳〵へばかりながれるものではない。」

太郎「それでは、大きな〳〵池のよーなものでありますか。」

百千

父「さよーさ、池を、百も千もあつめたならば、いくらか、海ににませう。しかし、くはしいことは、目で見ねば、わかるまい。次の日よー日には、海べへつれて行かうほどに、まってゐなさい。」

といひました。

第四　海ノケシキ

次ノ日ヨー日ニ、太郎ハ、父ニツレ

知

ラレテ行ッテ、ハジメテ、海ヲ見マシタ。

見レバ、向ウハ、一メンノ水デ、ハテモナク、青イナミガツヾイテ、天ト水トノサカヒメモ知レヌ。オキニハ、クロ

引貝

ケムリヲハイテ走ルジョーキセンモアリ、白イ鳥カト見エルホカケブネモアル。イソベニハ、リョーシガ、大ゼイアツマッテ、アミヲ引イテヰル。

青イ松、白イスナ、キレイナ貝ガラ、見ルモノモ〳〵、メヅラシイ。「ドウヂヤ、海ハ、ワカッタカ」ト、父ガ問ヒマシタ。

「ハイ。ワカリマシタ。ソシテ、スキニナリ

海

マシタ」ト、太郎ハコタヘマシタ。

第五　さゞえのじまん

大海のそこに、たひ、かれひなど、たくさんあつまって、あそんでゐました。その時、さゞえがいふには、

「先日、おまへたちが、大がににおっかけられて、あわてたかっこーはみにくかった。これからは、おれを見習って、

習

ふだんから、よーじんなさい。かういふかくれがを作っておけば、何がきても、おどろくことはない。』と云ひました。

何

皆々、さゞえのこーまんを、にくいとは思ったが、し方が

皆

音

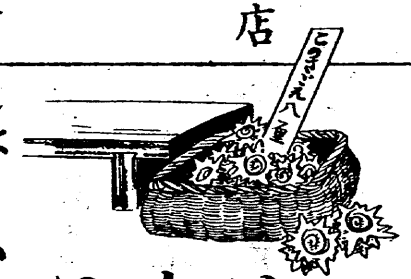
ないから、だまって居ますと、にはかに、すさまじい音がして、上から、何かおちてきました。そりゃこそ、と、うろたへて、魚どもは、皆、にげちりました。

さゞえばかりは さわがず、かひの中へ引っこんで、内から、ふたをしめて、しばらく、じっとしてをりました。やがて、そっと、ふたをあけて、のぞいて見ますと、何と

内

なく、よーすがかはってゐます。

よく〳〵見れば、じぶんは、いつのまにか、魚店のざるの中にはいってゐて、ふたの上には、「このさゞえ八厘。」といふしょーふだまで付いてゐました。



店

付

第六　一の谷のしろぜめ

昔、源氏平家のいくさに、平家は、一の谷の城にこもりました。一の谷は、前は海、うしろは山で、よーいにせめやぶることのできぬところであります。

源氏の大しょーよしつねは、ちえのある人ゆゑ、或夜、兵士をつれて、城のうしろの山にのぼりました。そのへんは、ひよどりごえと云って、大そーけはしいところであります。それ故、

或

城

平家方も、ゆだんをして、うしろには、何のそなへもない。よしつねは、ゆーよなく、馬に、むちをあてゝ、まっさきに、山阪をかけおりました。

阪

火

これにはげまされて、皆々、せめ下り、城のうしろから、火をかけた故、平家はまけて、西の海へにげました

年年

第七　春夏秋冬

日ガカサナレバ、月トナリ、月ガカサナレバ、年トナル。一年ハ、一月カラ、十二月マデノ十二ヶ月デアル。コレヲ、春。ナツ。秋。フユノ四ツニ分ケル。

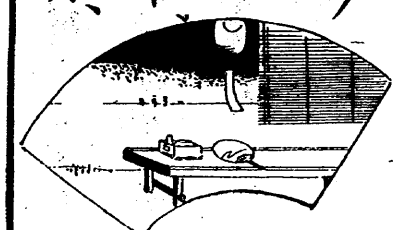
分

夏

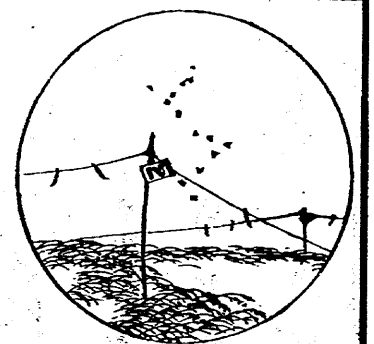
三月、四月、五月ハ、春デアル。アタ、カデ、草木ハ、メヲ出シ、花ハサキ、鳥ハウタフ。

六月、七月、八月ヲ、夏ト云フ。アツイ時デ、草木ガ、オヒシゲル。

秋ハ、スヾシイ時デ九月、十、月、十一月ノ三ヶ月デアル。風ガ、



冬　雪　毎

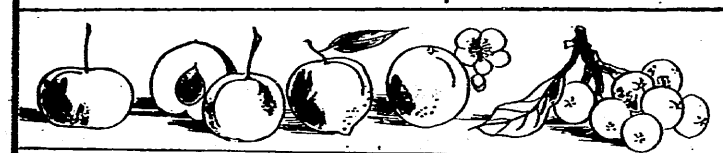


シダイニヒヤヽカニナリ、ヨロヅノコクモツガミノル。

十二月、一月、二月ヲ、冬ト云フ。木ノハガオチテ、雪ガフル。冬ガスメバ、又、春トナル。

毎年、同ジジュンニウツリカハッテ、イツマデモ、クルフコトハナイ。

梅　味



第八　くだもののうた

夏秋に
みのるくだもの、何々ぞ。
まづ、はつ夏のびはと梅、
つぎに、色づく桃、すもゝ、
いつか、あんずの味あまく、
赤らむりんご、さくらんぼ、
ぶどー、いちじゅく、なし、ざくろ、

林

くるみ、かき、栗、秋くれて、
ふく風さむくなるころは、
ぎんなん、みかん、きんかんや、
だいく、くねんぼ、ねんくに、
山に、林にみちくて、
ゆたかなるこそめでたけれ。

話　妹

第九　たけがりの話（上）

私が九つの時の話をいたします。或日、父が、私と妹とをよんで、「天きがよくば、次のかんなめさいには、たけがりにつれて行く。」といはれました。

二人とも、たのしみにして、まって居ますと、あやにく、其の日になって、雨がふってきました。

首

私は、ざんねんで、たまらない。ぜひ行くといって、すねて、ないて、しょーじをやぶったり、妹のにんぎょーの首をぬいたりしました。「そんなわがまゝをいふと、もう、どこへもつれては行かぬ。」と、父母がいはれました。けれども、ごーじょーをはって、きゝませんでした。

第十　たけがりの話（下）（練習文）

次の日よー日は、よい天きであった。妹は、いふことをきいて、おとなしくして居たほーびに、その日、たけがりにつれて行かれました。私だけは、こらしめのため、家にのこされました。

皆が、山で、おもしろくあそんで居るのが、目の前に見えるよーで、うらやましくて、ざんねんで、其の日は、一日、なきくらしました。こーくわい、さきに立たず、とは、此のことでございませう。

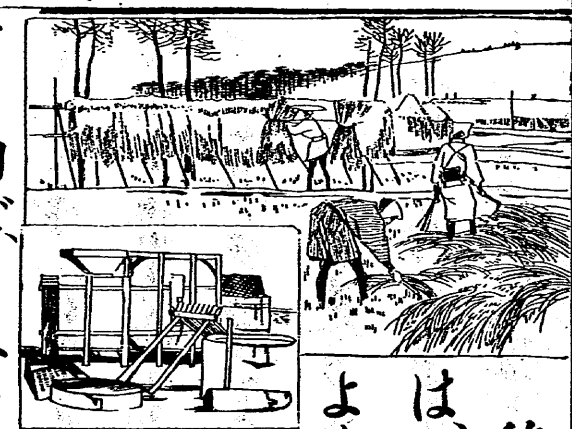
第十一　取り入れ

末　秋の末になると、田のいねが、よくみ

農　のって、農家は、取り入れにいそがしい。

稲

白



稲から、米を取るには、まづ、かり取った稲を、よくかわかし、稲こきで、ほをこいて、もみとし、もみぶるひで、これをふるふ。次に、すり臼で、もみをひき、とーみにかけて、もみがらをさり、それから、千ごく

白米

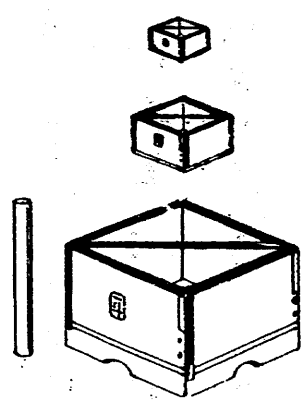
油

酒

どほしにかければ、米になる。これを、くろ米と云ふ。くろ米を、臼でつき、こぬかをされば、白米となり、白米をかしげば、めしとなる。

第十二　枡（マス）

枡ハ、米、麥、豆、油、酒ナドヲハカルウツハデアル。



斗升合

枡ニハ、一斗枡。一升枡。一合枡ナドガアル。一合枡デ十度ハカッタカサヲ一升ト云フ。一升ハ、一合ノ十バイデアル。一升枡デ、十度ハカッタカサヲ一斗ト云フ。一斗ハ、一升ノ十バイデ、一合ノ百バイニアタル。

第十三　こしをれ雀のうた(一)

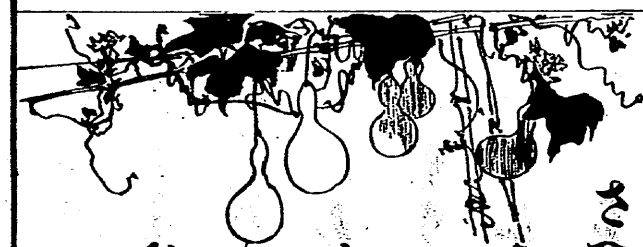
むかし〳〵、山ざとに、

待　去

心やさしきばゝ住めり。こしをれ雀が、にはにきて、くるしむを見て、あはれがり、くすりのませて、かいほーし、なほるを待って、はなちけり。

雀は、いともうれしげに、なきさへづりて、とび去りぬ。

窓　種　其



あくる日の朝、窓口に、
さへづる雀かまびすし。
戸をあけて見れば、ひょーたんの
種のみ、たくさんのこりけり。
其の種取りて、まきけるに、
花ときそろひ、みのなりて、
ひょーたん、あまた、できにけり。
のきにつるして、ほしてのち、

おろして見れば、ふしぎやな、
なかに、何やら、物みてり。
ばゝは、おどろき、ふり見れば、
あふれこぼるゝ上白米、
さらり、さらく、
さらく、
取ってもく、
取りきれず。

ばゝは、これより、家とみぬ。

第十四　こしをれ雀のうた（二）（練習文）

となりに住めるよくふかばゝ、
このこと知りて、
うらやみて、
或日、一羽の小雀を
とらへて、わざと、
こしををり、

くすりのませて、かいほーし、
なほるを待って、はなちけり。
雀は、いともかなしげに
なきさへづりて、とび去りぬ。
あくる日の朝、窓口に、
さへづる雀かまびすし。
戸をあけて見れば、ひょーたんの
種のみたくさんのこりけり。

其の種取りて、まきけるに、
花さき、そろひ、みのなりて、
ひょーたん、あまたできにけり。
のきにつるして、ほしてのち、
おろして見れど、こはいかに、
たゞ一つぶの米も出ず、
ぞろり、ぞろ〳〵、ぞろ〳〵、
はひ出す あぶ。蜂。へび。むかで。

さす、かむ、まきつく、
おそろしや。
ばゝは、其のばに
たえ入りぬ。

第十五　アリトセミ

秋ノ末ニ、ウエツカレタ一ピキノセミ
ガアリマシタ。或日、アリノスミカニ來テ、
「少シバカリ、食ヒ物ヲメグンデ下サレ。」ト

來
食

間　云ヒマスト、アリハ、「メグマナイモノデモナイガ、一タイ、オ前ハ、夏ノ間、何ヲシテ居タ。」トタヅネマシタ。

有　セミ、「夏ノウチハ、木ヤ草ニ、アマイツユガ、タクサン有ッタ故、ソレヲスッテ居マシタ。ソレカラ、此ノヨーナ、スヾシイ着

着　物ヲ着テ、毎日、ウタヲウタッテ居マシタ。」トコタヘマシタ。

聞　アリハ、コレヲ聞イテ、「オ前ノヨーニ、長イ日ヲ、ムダニ

者　アソビ　クラシタ者ガ、秋ノ末ニナッテ、コマルノハ、アタリマヘダ。我レラガ、アセ

集　ヲナガシテ、アツイ日ニモ休マズ、集メ

夕食ヒ物ハ、オ前ノヨーナナマケモノニハヤラレヌ」ト云ヒマシタ。

第十六　勉強がしら

勉強

父「うちじゅーの勉強がしらは、だれであらう」。

助

太郎「五助でございませう」。五助は、朝早くおきて、日のくれるまで、はたらきます」。

番黒

おきよ「みけでございませう。みけは、よく、ねずみをとります。

父「五助でも、みけでもない」。

太郎「それでは、よく、番をする黒でございませう」。

父「いや、黒でもない」。

太郎「そんなら、ありでございませう。ありは、勉強する虫だと、先生がおっしゃいました。」

父「いや、ありでもない。ありも、冬になれば、あなの中にひっこんで、何もしませぬ。夏も、冬も、夜も、ひるも、休まずにはたらく者が有る。あの柱をごらんなさい。」

柱

時計

晩

間

太郎「あゝ、時計。」

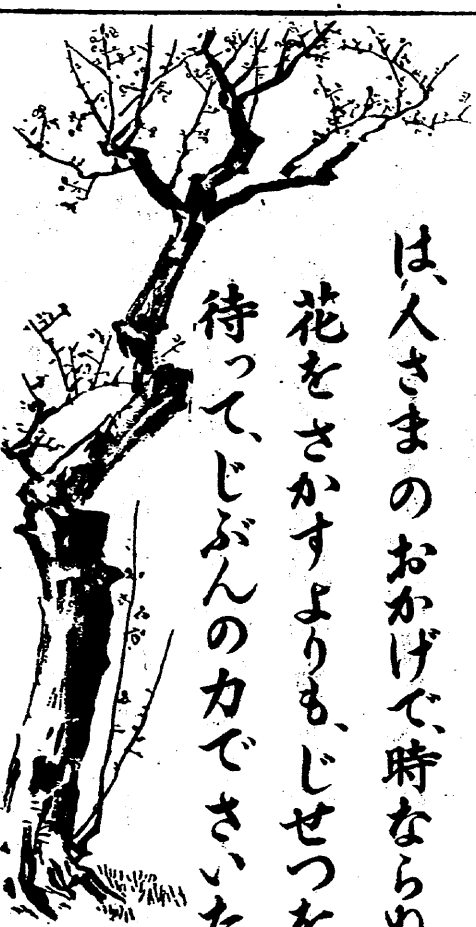
おきよ

父「さよーー。時計は、朝も、晩も休みませぬ。それに、又、しょーーぢきで、時間をまちがへませぬ。」

第十七　むろの梅とにはの梅（練習文）

ちょーどさかりのむろざきの梅が、まだ花のさかぬにはの梅に向って、「わたしは、からだは小さくても、もう、

このとほり、花ざかりだのに、お前は、からだの大きいくせに、まだ一りんも さかぬとは、さて〳〵、いくぢのない。」と、あざけりました。にはの梅は、おとなしく、「わたしとても、人さまの力をかりて、雪しもにあたらぬよーに、あたゝかいところにばかり ひっこもって居たならば、お前と同じよーに、とうに、花をさかせたでもあらう。しかし、わたしは、人さまのおかげで、時ならぬ花をさかすよりも、じせつを待って、じぶんの力でさいた



ほーがよい、と思ひます」。

かういって、にはの梅は、にはのすみをゆびざし、「あの梅をごらんなさい。人の力で、さいたの故、きょねんぎりで、ことしは、さきませぬ。」といひました。

見れば、きょねん、一ぱいに花のさいたむろの梅が、ことしは、にはのすみにおろされて、まだ、一りんのつぼみもつけず、いくぢもなく、かじけて、ちぢこまってゐました。

第十八　はです虎をころす

昔、はですといふ人、或年、天子さまのお使で、ちょーせんへまゐることになり、五つになる子をつれて行きましたが、其の年の冬に、ご用がすんで、かへるとて、或山中の宿にとまりました。

子使

山中宿

遊　急　虎

其の晩、ふと、子が見えなくなりました。どこをたづねても、居りませぬ。宿の者にきくと「うらの雪の中で、遊んで居なされた」といふ。急いで、そこへいって見ましたが、見えませぬ。たゞ、大きなけものの足あとがのこってゐる。其の足あとは、虎らしい。さては、虎がくはへていったかと、はですは、足あと

第　處

をしたって、かけて行きました。

次第に、足あとは、山おくの方へつゞいて居ます。とーく、あなの有る處へ來た。

かなしや、子は、もう、食はれてしまった。

虎は、はですを見ると、口をあけ、きば

をならして、かみかゝりました。はでは、「おのれ、我が子のかたき。」と、切ってかゝって、とゝ〳〵、虎をころしました。

第十九　炭

炭ハ、木ヲムシヤキニシタモノデアル。炭ニヤクニハ、カシ、栗、クヌギナドガヨロシイ。先ヅ、コレラノ木ヲ、程ヨイ長サニ切ッテ、大キナカマドニ入レ、

炭　程

頃

イクヘニモ、ツミカサネテ、カマドノ口カラ、火ヲツケテ、ヤクノデアルサテ、火ノマハッタ頃、ソノ口ヲフサギ、ジコクヲハカッテ、木ノ、赤クヤケタノヲ取リ出シ、土ヲカケテ、ケセバ、炭トナル。コレガ、火バチ。イ

用　ロリナドニ用ヒル炭デアル。

第二十　しほばら多助

昔、しほばら多助といふ、心がけのよい男がありました。或炭問屋にほーこーして居ましたが、ふだん、けんやくの心がふかくて、人のすてた古ぞーりまでも、ひろひ集めて、つくろうておきました。

問屋

古

主

或日、主人が、多くのぞーりを買ひ入れようとしました時、多助は、かねてつくろうておいた古ぞーりをもち出し、「これで、おまにあはせなされ。」といひました。

主人も、店の者も、多助の心がけにかんしんしました。

又、俵からこぼれ落ちる炭のくづを

俵落

數俵　元　申

主人にもらって、毎日はき集めて、たくはへておきました。そのうちに、數百俵になりました故、それをうって、いくらかのおかねにしました。さて、それを元手に、小さい炭屋をはじめ、次第にはんじょーして、とーく、大きな炭問屋となりました。

第二十一　岩戸びらき

昔、神代（カミヨ）と申した頃、天照大神（アマテラスオホミカミ）と申

様　御　氣

す日の神様がゐらせられました。御弟に、すさのをのみことといふお方がありました。氣のあらいお方で、度々、日の神のお心におそむきなされた故、日の神おいかりなされて、天（アマ）の岩戸（イハト）におこもりなされました。さーあ、大へん。日の神が、岩戸におこもりなされた故、せかいじゅーは、くらやみに

遠

なってしまひました。

神たち、大いにおどろき、色々ひょーぎの末、すさのをのみことを、遠い國へおひ下し、さて、日の神の御さげんをなほさうため、岩戸の前で、なり物をならし、

歌事

大そー おもしろ さうに、まったり、歌ったりなされました。何事かと、日の神は、岩戸を、少しあけて、おのぞき なされた、其の時、大力の神がかけよって、岩戸をおあけなされた。すると、ほかの 神たちも走りよって、御手を取り、とうく、

外世　祭女段

岩戸の外へおつれ出し申しました。そこで世の中は、又、元のとほり、あかるくなった、と申します。

第二十二　ひな祭

ひな祭は、昔からつたはった女子の遊びで、三月三日が祭日であります。色々のにんぎょーを、段にかざり、ひしもち白酒。桃の花などをそなへて遊びます。上の段

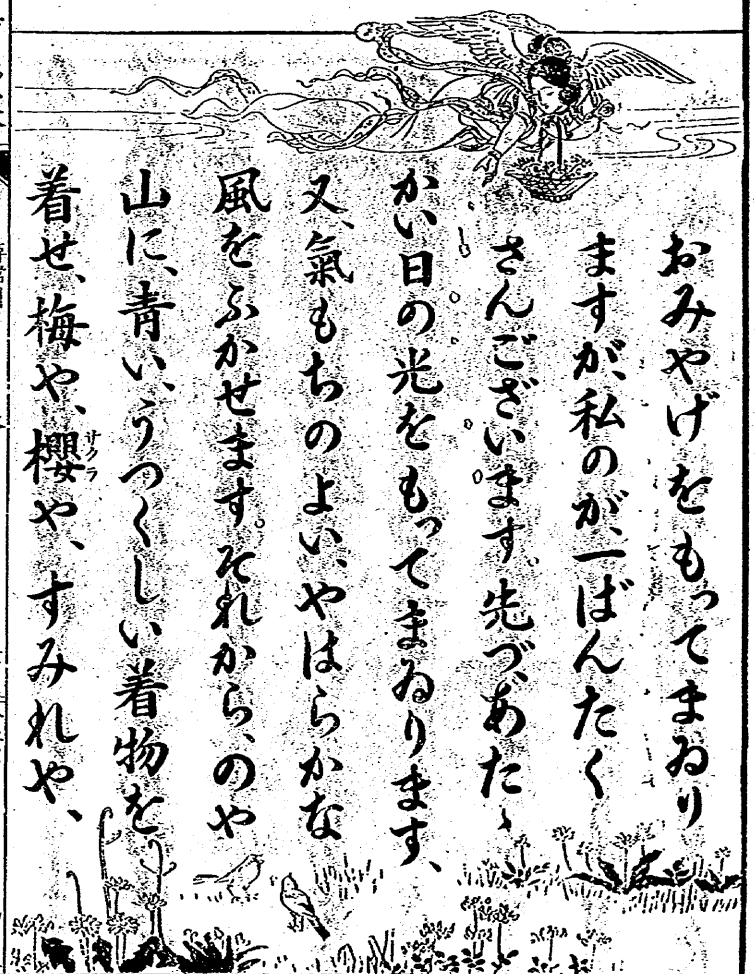
男名形

にならんだ男女の人ぎょーを、だいりびなといひ、中の段にならんだ三人を、くわん女といひ、下の段の五人を五人ばやしと云ひます。ひな祭は、女子が、ぎょーぎを習ふ、助けともなる、遊びであります。

第二十三　春（練習文）

私は、春でございます。皆さんのよーな、よい子どもしゅは、すきでございます。皆さんもまた、「春」「春」といって、私の來るのをお待ちなされて下さります。

そのよーにかはゆがって下さりまする おれいに、おみやげをもってまゐりました。私の妹の夏や、秋や、冬も、めいしくに、



おみやげをもってまゐりますが、私のが、一ばんたくさんございます。先づ、めたゝかい日の光をもってまゐります、又、氣もちのよい、やはらかな風をふかせます。それから、のや山に、青い、うつくしい着物を、着せ、梅や、櫻や、すみれや、

K120.8-226-1

たんぽゝに、きれいな花をさかせます。
それから、うぐひすには、歌をうたはせ、
ちょーには、まひをまはせます。
三月のしけんがすんだら、の山へ來て
ごらんなさい。色々のおみやげを、しょく
ほーぐにひろげておきませう。

巻四をはり

講内第1
8
170

明治三十四年十月三十一日印刷
明治三十四年十一月三日發行

（國語讀本 尋常小學校用 奥附）

巻ノ一	定價金八錢	巻ノ五	定價金拾貳錢
巻ノ二	定價金八錢	巻ノ六	定價金拾參錢
巻ノ三	定價金九錢五厘	巻ノ七	定價金拾參錢五厘
巻ノ四	定價金拾壹錢	巻ノ八	定價金拾四錢

著作權所有

編纂者　高知縣教育會
代表者　藤崎朋之
發行者　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社富山房
代表者　合資會社富山房社長　坂本嘉治馬
印刷者　東京市日本橋區藥研堀町三十三番地　仁科衛
印刷所　同所　厚信舍（電話浅花一四六番）

發兌元　合資會社富山房（長距離電話本局加入一〇三六番）（電報翌號ヤマフ）
（明治廿九年六月設立）